

平成 23 年度（4～6 月）西神戸医療センターにおける医療事故

年・月	事故の概要	再発防止策
H23.4	<p>悪性リンパ腫のため、絶食が必要と考えられた患者に、高カロリー輸液を行うため PICC カテーテルを挿入した際に、スタイレット（内筒）を抜去せずに残留させた。</p> <p>下記の事故を受け、処置を行った医師が同様の症例を見直したところ、スタイレット（内筒）の残留が判明したため、胸腔鏡下での回収を行った。</p> <p>経過は良好で後遺症はない。</p>	<p>この事案後、PICC カテーテルをスタイレット（内筒）の無い製品に変更するとともに、挿入手技の指導の徹底を図った。</p>
H23.5	<p>胃の腫瘍のため、絶食が必要と考えられた患者に、高カロリー輸液を行うため PICC カテーテルを挿入した際に、スタイレット（内筒）を抜去せず残留させた。</p> <p>その後のレントゲン撮影の際に、スタイレットの残留を確認し、放射線科医師により回収した。</p> <p>経過は良好で後遺症はない。</p>	<p>この事案後、PICC カテーテルをスタイレット（内筒）の無い製品に変更するとともに、挿入手技の指導の徹底を図った。</p>

上記事故において、体内に残留させたスタイレット（内筒）とは、普通のハサミでも切ることができる直径 1 mm 未満の細いワイヤー状のものです。

なお、処置を行った医師は「消化器科の 30 歳代の男性医師」と新聞等で報道されましたが、正しくは「消化器科の 20 歳代の男性医師」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。